

よく見てかこう

## しらせたいな、見せたいな

新しい指導を考える会

## ■書くことの基本を身につけ、楽しんで書く子どもに

一年生の成長は著しい。文字を習得し、語彙を増やししながら「書くこと」にも意欲をもち始める。内田伸子氏は、「一年生九月には書字能力がほぼ完成する」とされ、「九月までには、七五%が黙ったまますら書き続ける」という作文能力の調査結果を報告している。（内田伸子『ことはと学び』金子書房1996）一学期 子どもたちは「たんけんしたよ、みつけたよ」「や」「てがみをかこう」などで、相手や目的を考えながら、楽しく書く活動に取り組んできた。個人差はあるものの、二学期を迎えた子どもたちの文章表現力は、確実に伸びている。

本単元では、「学校生活のことを家の人に知らせる」という目的で文章を書く。取材、構成、表現の工夫、推敲といった書くことの基本を初めて指導する単元でもある。そこで、「書くこと」する題材に必要な事柄を集める「ことに指導の重点を置く」「必要な事柄」は、相手意識・目的意識をはっきりさせないと見えてこない。書くことすることへの動機づけと、だれに何を知らせたいのかをしつかり意識させることが大切である。

指導のポイントとして次の三点をあげる。

○ 本当に知らせたいものを見つける。

書く活動においては題材が命である。生活科と関連させて身近な生活に目を向けるようにしておく。「はっけんカード」を振り返ったり新たな体験をしたりして、相手にいちゃん伝えたいことを見付けさせる。五感を働かせるような手だてを取ることも大切である。

○ 一文をしつかり書く。

この時期の子どもたちは、ややもすると「〜して、〜して」と動詞の連用形が多用され、一文が長くなる。また、主述が照応しないことも多い。一学期の文作りを振り返り、端的な一文を書けるようにしたい。

○ 一文から、ひとまとまりの文章にしていく。

ひとまとまりの文章を書くことは、本単元で初めて指導する「それから」「そして」などの順接の接続語の汎用や、同じことの繰り返しがないようにしなければならない。一文の短冊カードを並べ替える作業を通して、文章の「組み立て」を経験させたい。

## ■単元の指導計画（総時数8時間）

第一次（第1～3時）知らせたいものを決め、取材する。

これまでの「はっけんカード」を振り返ったり、学校探検をしたりして、だれに何を知らせたいかを決める。

知らせたいものと十分に触れ合い、五感を働かせて「はっけんカード」に絵や言葉を書き込む。

取材したことをグループで発表し、書き込みをふくらませる。  
第二次（第4～7時）「はっけんカード」をもとに文章を書く。  
「はっけんカード」の中から文章にすることを選び、一文の短冊カードに書く。

短冊カードを並べ替え、文章の組み立てを考える。

教材文の書き方を参考にして、自分の文章を書く。  
書いた文章を読み返し、清書する。

第三次（第8時）書いた文章を発表する。

全体で書いた文章を発表し、感想を出し合う。

■一人一人に確かな「書く力」を身につけさせる実践事例  
1 「はっけんカード」に必要な事柄を集める。

子どもたちは、平仮名の習得後から、連絡帳に「ひと言あのな」を書き続けてきた。また、生活科と関連させ、「はっけんカード」も書きためている。それらを振り返り、「家の人に知らせよう」という学習の動機づけをする。今まで継続して見つめてきたものや、



五感カード

自分らしい発見に気づくことで、伝えることに意欲的になった。だれに何を伝えるかを考えたうえで、実際に学校内を探検する。もちろんこの段階で新たな伝えたいことを見つけてもよい。今までに発見したことをさらにふくらませるよう、五感カードを使う。五感カードで取材することはまだ無理だと思われるので、今回は「はっけんカード」の裏に印刷しておき、取材の観点として意識つけた。この経験により、これからどんなことに目をつけて取材すればいいかが身についてくるだろう。

○ 題材が見つけれない子どもに対する支援  
「何書くか分からん。」とA児がつぶやいた。題材が見つけれない子どもについては、書きためたものや日ごろの興味・関心などから、個別にアドバイスする。その子らしいものを見付けさせる支援が必要である。

A児は、五月の学校探検でウサギの赤ちゃんが生まれたことを「はっけんカード」に書いていた。しかし、具体的なことは何も書かれていない。そこで、実際にウサギを抱く活動を取り入れた。おそるおそるウサギを抱くA児は、耳がざざざになった。ことに気がついた。



「かまれたのかなあ。ウサギさんもけんかするのかなあ。」とつぶやく。早速、五感カードの「め」と「こころ」を動かしたことをほめ、「はっけんカード」の中に書き込むよう声をかけた。自分の書きたいことを見つけるための、一人一人に応じた手だてが必要である。



はっけんカード

## 2 「はっけんカード」をもとに一文を書く。

第二次では、まず、「はっけんカード」の取材をもとに一文を書く。自分の伝えたいことに合わせて、書くことを選ぶ経験もできればほしい。「はっけんカード」には、形容詞や述語だけが書かれていることが多い。そこで、一学期の文作りの学習を振り返り、主述のはっきりした文章を書くおさらいをした。「～して、～して」とだらだら書くことがないよう、一文に二つのことを書くようにする。しかし、すっきりした文であれば二つのことが入ってもかまわない。子どもの表現力に合わせた指導をしなければならない。

○一文がふくらまない子どもに対する支援

B児は、取材をそのまま一文にしてしまつ。「はっけんカー

ド」の「にわとり」の取材は次のようであった。

あかいぼうし・ひらひら・くちばしがとんがってる・えさをつついた・めがこわい・めがあかい・こわい・はねがしろい・ばさばささせた・とんだ・あしがほそい・つめがある・ないた

そこで、B児の書いた一文に五感のマークを付けた。すると左のようにふくらんだ。

○なきました。B  
↑（鳴き声を思い出して入れる。）  
○こっここ、こけこっこうとなきました。

○めがこわいです。♡  
↑（思ったことを入れ、二文にする。）

○こわいめで、にらんでいました。  
○にわとりも、わたしがこわいのかな。

何をどのようにふくらませるか、五感をさらに働かせることが大切である。

○自分で書き進められる子どもに対する支援

C児は書くことが大好きで、一人で書き進める。いちばん書

きたいことは、「大きくなつたウサギ」だつた。しかし、ウサギは穴の中にいることが多く、成長の様子は目にできなかった。いくつかの疑問があつたので、飼育委員に聞くことをアドバイスする。六年生は快く答えてくれ、C児はその部分を次のように書いた。

- うさぎのあかちゃんは、五つ生まれました。
- 四わが、あなのなかでしんでしまいました。
- 六年生のおねえちゃんたちが、のこつたクロを、きょうしつでそだてました
- クロは、だいにそだてられて、よかつたです。

## 3 一文カードを並べ替え、ひとまとまりの文章にする。

どのような順番で書くかを考えるには、短冊カードが有効である。まず、同じ内容の事柄をまとめた。次に、どのような順番にするか、短冊カードを並べてみる。

子どもたちは、まだうまく接続語が使えない。「そして」で文章をつなぐことも多い。接続語は個別に指導した。書き終わったらグループの中で読み合い、うまく流れているかを確かめ合つとよい。時間的な順序やしたことこの順序に気づくこともできるだろう。

○うまく書きだせない子どもに対する支援  
書きだしてつまずく子どもは多い。うまく書きだせると、あとは流れるように書くことがある。まず、教材文では、どのよ

うに書きだしているかを見つけた。「学校に、。。がいます。」と、初めに知らせたいものを紹介している。また、児童文集からいくつかの書きだしをピックアップし、紹介した。それでも書きだせない子どもには、好きな書きだしを選ばせ、自分の書きたいものを当てる方法を取つた。

### ■評価

子どもたちは、「書くこと」の一連の経過をたどることを初めて経験した。文章を書くことは個人的な活動場面が多い。全体にかかわることは一斉指導したが、いくつかの場面で見られたつまずきには、個別の支援が必要であつた。個の思いを何より大切にしたいからである。

本単元の主目標である「書くこととする題材に必要な事柄を集める」ことは、五感カードの提示やグループの読み合いにより、内容がふくらんだといえる。「ふりかえりカード」で自己評価させているが、取材場面の評価がいちばん高かつた。ただ、集めたものすべてを書く傾向がみられたので、今後は「必要な」ということに目を向けて取材することを指導していかなければならない。

書いた文章を持ち帰り、家の人に感想を書いてもらった。発表会では、自分の文章と家の人の感想を読み、お互いに評価した。もらった感想も含めて発表したことは初めてである。どの子もつれしそに発表する姿が見られた。書く喜びを味わったことは何よりの成果で、次の学びに生かされるだろう。